

# 福島の子どもたちは、いま

「神奈川リフレッシュプログラム」へキックオフ

**5月14日(日)**

**11:00～13:00(開場10:45)**

**講演：「教室から見た檜葉っ子」(仮題)**

日野彰さん(檜葉中学校教員)

**報告：「檜葉学童保育を訪問」**

「リフレッシュプログラムについて」

こらっせユース



3.11から6年が経過し避難指示は次々と解除され、今年の春には4町村3万2千人が帰還の対象となりました。来年3月には東電からの感謝料が打ち切られ、仮設住宅も閉鎖。自主避難者は無償住宅供与の終了が目前にせまっています。まるで原発被災がすでに終わったかのようです。そして今になってあきらかになりはじめた福島っ子へのいじめ。

2015年9月に全町帰還のトップランナーとなった檜葉町には、役場近くに保育園、診療所、復興住宅からなるコンパクトシティが建設されました。4月には檜葉町で小・中学校が再開され、100人の檜葉っ子たちが(小学生53人、中学生47人)、同じ校舎で学ぶことになりました。3.11の後、子どもたちは友達との悲しい別れがありましたが、再び、いわきに残るか檜葉に戻るか、つらい選択をせまられたと聞きます。

日野彰さんは3.11直前まで檜葉中学校で教鞭をとられていましたが、3.11以後は福島県教職員組合の専従となり浜ブロック担当、原発災害担当として活動されてきました。2016年度からは現場に戻り檜葉中で数学を教えられています。3.11以後、激動する環境の中での子どもたちの様子を、福島県全域からそして教室からつぶさに見ていらしたので、その経験を共有して、子どもたちのために何ができるのかを話しあえたらと思います。

「こらっせユース」の大学生たちも「こらっせ」の活動について報告します。

**会場** : 県民サポートセンター 11階コラボスタジオ

<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f5681/p16362.html>

**参加費** : 500円

**主催** : 福島子ども・こらっせ神奈川

**連絡先** : TEL:045-353-9008 FAX:045-353-9998

E-mail: [info@korasse-kanagawa.org](mailto:info@korasse-kanagawa.org)

## 楡葉小中校は試行錯誤で再開 日野彰（元楡葉中学校教員）

5月14日（土）かながわ県民活動サポートセンターで、2017年度「神奈川リフレッシュプログラム」に向けたキックオフ講演会が行われました。約30人が集まり、講師の話や学生の報告を熱心に聞きました。

最初にあいさつに立った山際正道代表は「楡葉町は帰還を進め小中学校が楡葉町で再開されましたが、悩みながら試行錯誤で進めているようです。私たちは子どもの立場に立って支援を進めます。今年も『リフレッシュプログラム』を成功させましょう」と述べました。

### 避難指示解除は進んでいるが



このあと元楡葉中学校教員の日野彰さんから「教室から見た楡葉っ子」と題する講演がありました。日野さんの講演の概要です。

福島第一原発事故から6年が過ぎました。原発事故被災地の状況を報告します。飯館村はかなり除染作業が進んでいますが、放射線量はまだ高いのが現状です。浪江町は避難指示が一部解除され、来年度から浪江東中学校の校舎を使って授業を再開する予定です。駅前通りには人はいませんでした。震災直後の浪江町は津波の被害があり、消防団が駆けつけ救助活動をしました。「明日また来るからな」と言って消防団は去ったのですが、その夜に強制避難の指示

があり、捜索は打ち切りになりました。捜索が再開されたのは1ヶ月後で、がれきに挟まったまま餓死された方もかなりいたそうです。「助けられたはずの命」と考えると、とてもつらいです。

私の自宅がある富岡町は、津波の被害もあったのですが、がれきの撤去が始まったのは震災後4年半経ってからです。富岡駅前にはロータリーとバス停ができていました。除染廃棄物の入ったフレコンパックの数は減ってきました。しかし、原発事故さえなければ、1年もかからずに復興していたはずでした。

避難指示は少しずつ解除されています。楡葉町は、4月末の時点で住民の22%ほどが帰還しました。広野町の場合は避難指示解除後3年ほどで人口は増えてきたため、楡葉町でも帰還が進むのはまだ先になると予想されます。しかし、来年3月には賠償金は打ち切れ、福島県は自主避難した人への住宅支援も打ち切ったことで、仕事や住居がない人はどうすればいいのか。避難者の心配は尽きません。

現在、福島全体では7万1000人が避難しています。約半数の家族が2か所以上に別れて住んでいます。双葉地方では道路一本をはさんで賠償金の額が違うこともあります。いわき市では津波被害で家を失った人は、原発事故避難者のような賠償金がありません。こうしたことで、人々の中に対立が生まれました。自主避難して戻ってきても不安を口に出せない雰囲気があります。

公営住宅はまだ70%しかできていません。遅すぎて入る人が少ないのが現状です。住宅除染はまだやっています。多額のお金が使われていますが、もう帰らないという人もいるわけで、ひとりひとりに寄り添った支援をしてもらいたいと思います。

福島県内で甲状腺がんは185人出ています。甲状腺がんに関しては19歳以上も医療費は無料となりました。原発の影響はないという県の見解を支持するわけではありませんが、何ともいえません。専門家でも意見が分かれています。

大熊町や双葉町には、帰りたくても帰れません。帰還の見通しすら立っていません。帰ることを望んでいる人は約1割です。常磐自動車道と国道6号線が開通しています。線量は少し下がりましたが現在でも3.5 $\mu$

SV/hという高さです。昨年5月、バスと軽自動車正面衝突事故を起こし、事故処理のため何時間も現場にとどまりました。放射線量の高い帰還困難区域に何時間もとどまり、被ばくさせられたのです。

双葉郡の子どもたちの数は震災前には6397人いました。震災後に学校を再開したのは現在22校で546人です。大半の子どもたちは家族とともに避難した地区の学校に普通に行っています。しかし双葉の学校には、支援の必要な子どもたちがたくさん通っています。富岡の小学校は、三春町の工場を改装して利用しています。大熊中学校は避難先の会津若松市内のプレハブ校舎で授業を行っています。

南相馬市の小高区の4小学校は4月から合同で再開しました。飯館村の小学校は川俣町で、中学校は飯野町で授業を行っています。福島市の大波小学校は放射線量が高いこともあり転校が相次ぎ、2014年3月に休校となり、2017年3月に廃校になってしまいました。原発から60kmも離れた地区で廃校になってしまうことは、原発事故が広範囲を汚染することを意味しています。

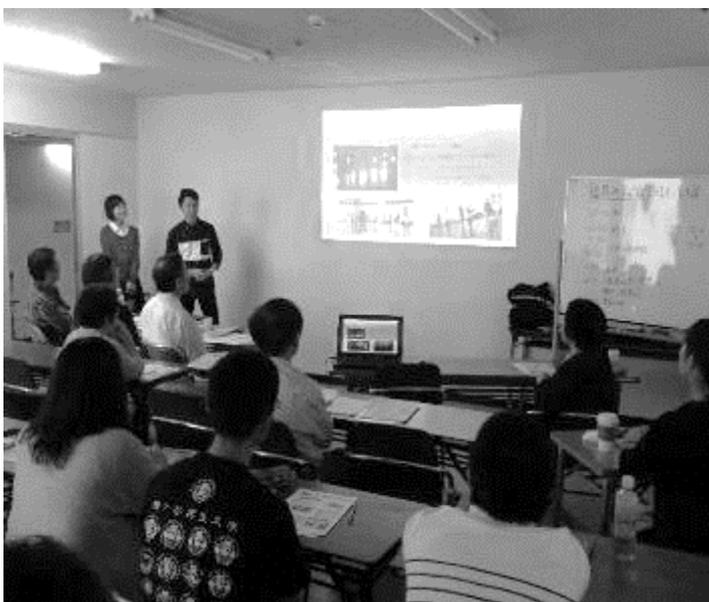
## 106人の生徒が戻った檜葉小中校

檜葉町は今年4月に学校が再開、106人(震災前の15%)が戻りました。子どもたちと教職員一丸となってがんばり、中学1、2年生は全員戻りました。全生徒スクールバスで送り迎えしています。いわきからJR常磐線を通っている子どもも17人います。いわき市の泉駅から通っている子どもは6時前に家を出ます。檜葉町は、通学定期代や給食費は無償、学力向上のために公営塾も提供します。IT教育に力を入れ、子どもたち一人ひとりがタブレット利用できる体制です。IT機器の操作に、先生が追いつかないことが悩みの種です。

大きな家に住んでいた子どもたちは、仮設住宅に入ると自分の部屋がありません。住宅が狭いため、親と中学生が川の字になって寝るわけです。また、家族の喧嘩や愚痴などが聞こえてくることもあり、家に帰りたくないという中学生もいます。仕事がなくなった親を見て悲観してしまい、夢を持たない子どももいます。

教職員も自分の家族の問題、住居の問題などを抱えていて、学校に来れば避難してきた子どもに寄り添って支援をしています。震災、原発事故に起因する業務も増加しました。少し落ち着いてきましたが、何とか持ちこたえているという感じです。

日野さんの講演の後、フロアからの質問・意見を受けました。交わされた質疑は、「給食に使われている福島県産の食材はきちんと検査をして安全なものだけを使っている」「檜葉町では猪が出るのでスクールバスは玄関先まで行く」「放課後の過ごし方は、中学生は部活動、小学生はバスで自宅へ直行するため友達同士で遊ぶ機会がない」「夏休みの部活動もバスで送迎し、終了後は学習会も実施している」などです。



## 「こらっせユース」も報告

「こらっせユース」の大学生が報告しました。杉野迅さん、高田準矢さん、鈴木香瑠さんが昨年夏に山北町で2泊3日で行った「リフレッシュプログラム」について、写真などで詳しく説明をしました。また、梅澤賢之さん、福嶋晶さんが、春休みに行った学生によるいわき市での檜葉学童保育支援の様子を報告しました。どちらの報告も、パワーポイントを使ったプレゼンテーションで、子どもたちに対する気持ちがよく伝わってくる、とてもわかりやすい内容でした。